

夏本番

市民の方が最も身近に感じられている害虫の一つが蚊です。ゆらゆらと流れる蚊取り線香の煙は、夏の風物詩でもあります。その蚊についての相談がありました。基礎的な話になりますが、その内容を紹介します。

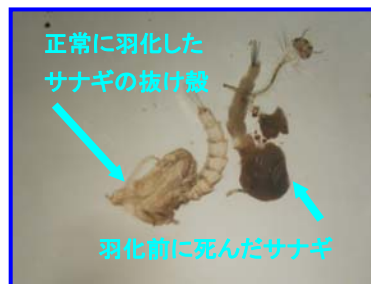
保育園の保育士から「園児が蚊に吸血されて困っています。何とかならないでしょうか。」との相談です。早速、現場調査を行いました。保育園の庭には、あちらこちらに蚊取線香や電子蚊取が置いてあります。中には、もうもうと煙が立ち込めている蚊取線香もあります。

吸血種の特定

まず、最初に加害種の調査を行いました。保育園の庭で話をしていると、早速、蚊が吸血に来ました。黒い体の各部に明瞭な白い模様に分かります。ヒトスジシマカです。ヒトスジシマカが吸血のために飛来してくる時間帯は、一般的には日中です。園児たちが保育園の庭で遊ぶ時間帯です。室内では、網戸で侵入を防ぐこともできますが、保育園の庭では、そうした侵入防止対策は、行うことができません。そのために蚊取線香で蚊の飛来を防いでおられたのでしょうか。



ヒトスジシマカ成虫



ヒトスジシマカ幼虫の発生源

ヒトスジシマカの幼虫の発生源は、小さな水たまりです。放置された空き缶などに雨水がたまることによって幼虫の発生源になります。保育園を調査しました。園の中にある雨水ますで大量に幼虫が発生していました。ガレージに古タイヤが放置され、その古タイヤの中にも雨水がたまり、たくさんの幼虫が発生していました。更に保育園の外にある道路脇の雨水ますにも大量の幼虫が確認できました。

成虫対策よりは幼虫対策

ヒトスジシマカ成虫は、幼虫の発生源の付近で吸血活動をすると言われています。そのため幼虫の発生源の対策を行えば、成虫の飛来も抑制できる可能性があります。そこで、保育園内部や周辺の雨水ますに殺虫剤を散布することを指導しました。

「どのような殺虫剤を散布するのですか。」という質問を受けました。そこで、調査用に私たちが使用しているピリプロキシフェン（商品名スミラブ）を紹介しました。雨水枡の大きさによって異なりますので投入量の計算は、必要ですが、普通、一つの雨水ますに1錠（0.5g）を入れます。月に1から2回程度です。散布や取扱いが簡単で、毒性が少ないのが、大きな特徴です。

幼若ホルモン活性

ピリプロキシフェンは、幼若ホルモン活性をもつ殺虫剤です。蚊の幼虫は、卵からふ化した初令幼虫から3回の脱皮を繰り返し、終令（4令）幼虫になります。終令幼虫は、脱皮してサナギになります。こうした脱皮を制御しているホルモンがあります。脱皮ホルモンと幼若ホルモンです。ピリプロキシフェンは、幼若ホルモンと同じような作用をします。ピリプロキシフェンを発生源に散布すると幼虫の体にプロキシフェンが取り込まれます。そのために、サナギの段階でホルモンのバランスを崩して死んでしまいます。

ヒトスジシマカ対策のポイント

ヒトスジシマカが幼虫の発生源の近くで吸血をするといっても、数十メートルは、飛行できます。保育園だけではなく、周囲の住民とも協力し、できるだけ広範囲を対象として幼虫対策を実施することで、保育園での園児の吸血被害は、激減するはずです。

秋には、朗報が聞けるかも知れません。